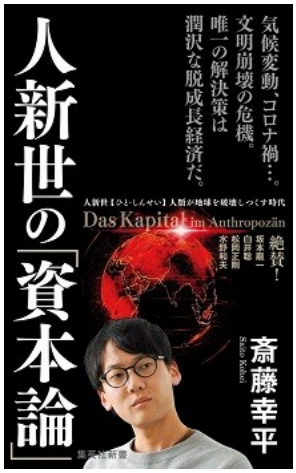
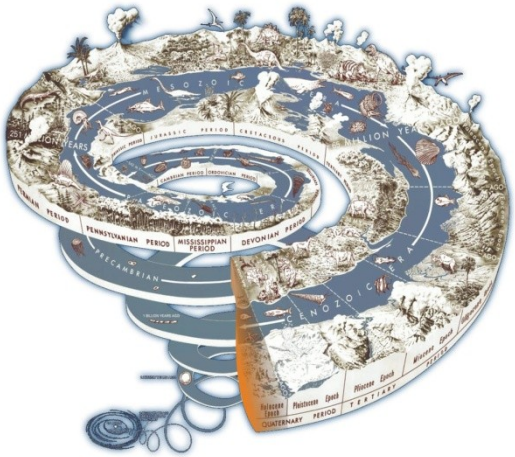
# 斎藤幸平「人新世の「資本論」」を読んで

大谷美芳(2021 年 4 月 3 日)



評判の書と聞く。『人新世―』は、あるノーベル化学賞受賞者が「人類の経済活動が地球に与えた影響があまりにも大きい」ので、「地質学的に見て地球は新たな時代」(p4)、と名づけた。

筆者の主張が分かるよう、章構成に従い、引用を多くし、逐次コメントしていく。

（注）人新世（Anthropocene[)]とは、人類が地球の地質や生態系に重大な影響を与える発端を起点として提案された、完新世（Holocene, ホロシーン）に続く想定上の地質時代である（Wikipedia）

## はじめに　SDGs は「大衆のアヘン」である！

……「人新世」における資本と社会と自然の絡み合いを分析していく。(p6)

資本主義批判を環境問題=人間と自然の関係にまで進めていた、と筆者はマルクス晩年の理論的営為を総括している。

（注）持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）とは、持続可能な開発のために国連が定める国際目標で、17 の世界的目標、169 の達成基準の指標がある

2015 年 9 月の国連総会で採択された『我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ』(Transforming our world: the 2030 Agenda for Sustainable Development) と題する成果文書で示された 2030 年に向けた具体的行動指針で、2015 年までの達成を目指していたミレニアム開発目標（MDGs: Millennium Development Goals）が継承されている。（Wikipedia）

## (１)グローバリズムと環境問題

### 第１章　気候変動と帝国的生活様式

人間を資本蓄積のための道具として扱う資本主義は、自然もまた単なる掠奪の対象とみなす。(p32)

……中核部での廉価で、便利な生活の背後には、周辺部からの労働力の搾取だけでなく、資源の収奪とそれに伴う環境負荷の押しつけが欠かせないのである。(p33)

……資本が利潤を得るための「安価な労働力」のフロンティアが消滅したように、採取と転嫁を行うための「安価な自然」という外部もついになくなりつつあるのだ。(p37)

資本は無限の価値増殖を目指すが、地球は有限である。(p37)

……廉価な労働力のフロンティアが喪失した結果、利潤率は低下し、先進国内部での労働者の搾取は激化している。同時に、環境負荷のグローバル･サウスへの転嫁や外部化も限界を迎えつつあり、その矛盾が先進国にも現れるようになっている。(p52)

資本主義は、①人間の搾取と自然の搾取である。格差を拡大し貧困を蓄積し、環境を破壊する。また、②中心部と周辺部(帝国主義と植民地の現代的関係)という世界システムである。人間

と自然の搾取、そして格差･貧困問題と環境問題、これを周辺部へ拡散し外部化するが、それは結局、中心部へ還流する。筆者のこの主張は納得できる。

しかし、周辺部も、資本主義化し工業化し従属から脱却する。現在はアジア、中国とインドは大きい。いずれはアフリカ。筆者はこの視点が弱い。対極で、中心部が、金融化し工業的に空洞化し第三次産業=サービス産業化する。それがグローバリズムである。こうして、格差･貧困と環境の問題は、中心部へ還流するだけでなく、世界的に加速する。

## (２)脱成長という資本主義批判

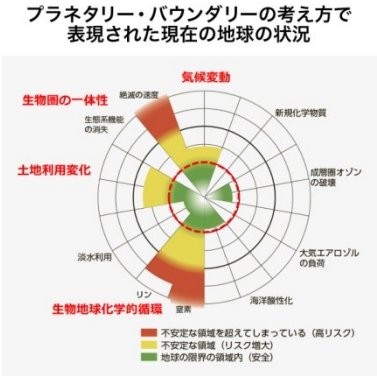
### 第２章　気候ケインズ主義の限界

「人新世」の生態学的帝国主義　結局、「緑の経済成長」を目指す先進国の取り組みは、社会的･自然的費用を周辺部へと転嫁しているにすぎない。(p86)

たしかに、自国では「緑」を謳う経済政策が実行されるかもしれない。だが、周辺部からの掠奪は深刻化していく。掠奪こそが、中核部における環境保護のための条件になってしまっているのである。(p88)

緑の経済成長=グリーン･ニューディール（A Green New Deal　GND）も、資本主義である限り、自然を搾取し破壊し、それを周辺へ転嫁する。例に挙げているのは、電気自動車のリチウムイオン電池に必要なリチウムとコバルトの、チリとコンゴにおける採掘、そこにおける環境破壊と劣悪な労働条件である(p82～85)。この主張も納得できる。

### 第３章　資本主義システムでの脱成長を撃つ




……先進国の人々はプラネタリー･バウンダリー(Planetary boundaries※地球の限界)を大きく超える暮らしをしている。他方で、途上国の人々は、社会的な土台に満たない生活を強いられている。現在のシステムは、環境を酷く破壊しているだけでなく、不公正なのである。(p104)

……問題の本丸は、公正な資源配分が、資本主義のもとで恒常的にできるかどうか、である。……外部化と転嫁に依拠した資本主義では、グローバルな公正さを実現できない。(p111)

資本主義とは、価値増殖と資本蓄積のため、さらなる市場を絶えず開拓していくシステムである。そして、その過程では、環境への負荷を外部へ転嫁しながら、自然と人間からの搾取を行ってきた。この過程は、マルクスが言うように、「際限のない」運動である。利潤を増やすための経済成長をけっして止めることがないのが、資本主義の本質なのだ。(p117)

労働を抜本的に変革し、搾取と支配の階級的対立を乗り越え、自由、平等で、公正かつ持続可能な社会を打ち立てる。これこそが、新世代の脱成長論である。(p137)

……新世代の脱成長論は、もっとラディカルな資本主義批判を摂取する必要がある。そう、「コミュニズム」だ。(p138)

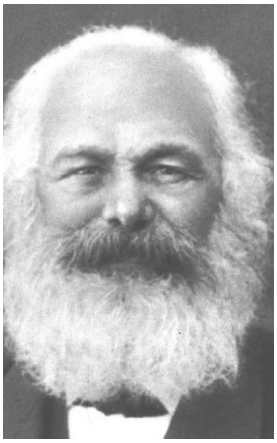
周辺部は、人間が生活する社会的な土台に達していない。中心部は、経済成長が地球の自然環境的限界を超えている。周辺は成長、中心は脱成長が必要である。そのためには資源の公正な配分が必要であるが、それが資本主義にはできない。資本主義は、搾取による価値増殖と資本蓄積をあくなき追求を本性とする。そのために経済成長を至上的に追及する。ここから、筆者は、資本主義の廃絶とコミュニズムを主張する。納得できる。

しかし、「脱成長」と言う。言うのであれば、「反搾取」だろう。成長の追求は搾取の追求の結果である。また、「労働を抜本的に変革」と言う。所有制の革命、生産手段の労働者階級による共同所有がないと、生産関係の革命はなく、労働と生産の目的は変革されない。

## (3)マルクスの晩年の理論的営為を「脱成長コミュニズム」と総括

### 第４章　「人新世」のマルクス

この章が本書の中心である。マルクスは、晩年、「掠奪農業」を批判し自然科学を学び、資本主義批判を環境問題=人間と自然の関係にまで進めていた。その結論は「脱成長コミュニズム」である。マルクス晩年の理論的営為を、筆者はこう総括している。



**①コモンとコミュニズム**

……マルクスは、人々が生産手段だけでなく地球をも〈コモン〉(common)として管理する社会を、コミュニズム(communism)として、構想していたのである。(p142･143)

生産手段だけでなく、地球=自然も共同で所有する。納得。

**②「人間と自然の物質代謝」　その「攪乱」「亀裂」**

マルクスによれば、人間はほかの動物とは異なる特殊な形で、自然との関係を取り結ぶ。それが「労働」である。労働は「人間と自然の物質代謝」を制御･媒介する、人間に特徴的な活動なのである。(p158)

……資本主義においては、極めて特殊な形で、この物質代謝が編成されるようになっていく。資本は自らの価値を増やすことを最優先にするからだ。そして、この価値増殖という目的にとって最適な形で、資本は「人間と自然の物質代謝」を変容していく。その際、資本は、人間も自然も徹底的に利用する。人々を容赦なく長時間働かせ、自然の力や資源を世界中で収奪しつくすのだ。……資本は人間と自然の物質代謝を大きく攪乱してしまうのだ。長時間の過酷な労働による身体的･精神的疾患も、この攪乱の現れであり、自然資源の枯渇や生態系の破壊もそうである。(p158･159)

……資本主義は物質代謝に「修復不可能な亀裂」を生み出すことになると、マルクスは『資本論』で警告した。(p159)

『資本論』は、物質代謝の「攪乱」や「亀裂」という形で、資本主義が持続可能な生産のための条件を掘り崩すことに警鐘を鳴らしている。(p160)

人間は労働を通して自然へ働きかける。それが生産。労働と生産は、人と人の社会的関係、および人間と自然の関係、この2つの側面がある。自然的関係が「物質代謝」、社会的関係が生産関係である。人間は社会を構成し社会を通じて自然へ働きかける。

資本主義における生産の目的は、人間の労働の搾取、それによる価値増殖と資本蓄積、そのあくなき追求である。人間の労働の搾取は、人間が労働を通じて働きかける自然の搾取でもある。人間も自然も回復し再生産されるには限界がある。それには「弾性」があるが、資本主義は搾取を追求して、それを超える。人間も自然も回復と再生産が不可能になり破壊される。自然的関係では「物質代謝」の「亀裂」「攪乱」、環境問題である。社会的関係では、端的に「格差の拡大と貧

困の蓄積」と言える。
　マルクスは、このように資本主義批判を人と人の社会的関係から、人間と自然の関係にまで拡大し貫徹した、と筆者は主張する。納得できる。

**③「持続可能性」と「社会的平等」　「脱成長コミュニズム」**
　……自然科学と共同体社会を研究することで、「持続可能性」と「平等」の関連について、マルクスは考察を深めようとした。……その結果、単に、コミュニズムへの経路が複線化するだけでなく、西欧資本主義が目指すべきコミュニズムの構想そのものにも大きな変容が加えられるようになったのだ。(p193)
　……共同体では、同じような生産を伝統に基づいて繰り返している。つまり、経済成長をしない循環型の定常型経済であった。……経済成長しない共同体社会の安定性が、持続可能で、平等な人間と自然の物質代謝を組織していた、というマルクスの認識が決定的に重要になる。(p193)
　……定常経済に依拠した持続可能性と平等が、資本への抵抗になり、将来社会の基礎になるとマルクスは結論づけたのだ。……マルクスが最晩年に目指したコミュニズムとは、平等で持続可能な脱成長型経済なのだ。(p195)
　マルクスは、原始共産制を含む前資本主義的共同体から社会主義・共産主義を学んだ、と筆者は言う。「コミュニズムへの経路が複線化」以外は、納得できる。
**・無階級社会と循環型社会**
　労働者階級は、生産手段を共同所有し、それによって労働と生産を主体的に管理する。人と人の社会的関係においては、搾取を廃止し階級を廃止し平等を実現する。人間と自然の関係においては、物質的代謝を持続可能化する。地球と自然は限界がある。それは物質代謝、人間が労働で自然に働きかける生産の限界となる。持続可能性のために、社会主義・共産主義の経済は、その限界の内、定常経済となる。
　後発国は、社会主義の後も工業化が必要であろう。したがって、先進工業国は、社会主義においては脱成長よりもむしろ縮小になる。資本主義の世界システムの中心部は、現在、工業的空洞化と金融化と第三次産業=サービス業化、これは、帝国主義の腐朽性と寄生性である。しかし、同時に、脱経済成長と縮小社会ための、条件の成熟でもある。
**・大きな意義がある**
　「社会的平等」と「持続可能性」を「密接に連関」させる。人と人の社会的関係、および人間と自然の関係、この両面を、資本主義批判に、したがって社会主義・共産主義論に組み込み含める。筆者は、マルクス晩年の理論的営為を、そう総括している。大いに同意する。

## (4)マルクス主義を批判的に総括

筆者は、ロシア革命や中国革命の指導理論であったマルクス主義を、マルクス晩年の理論と区別し、「脱成長コミュニズム」の立場で批判的に総括している。全く同意できない。
**①「生産力至上主義」という批判**
　まだ若かった当時のマルクスは、……資本主義の発展は生産力の上昇と過剰生産恐慌によって革命を準備してくれる。だから社会主義を打ち立てるために、資本主義のもとで生産力をどんどん発展させる必要があると考えていた節がある。いわゆる「生産力至上主義」である。(p150)
　……この誤解こそ、マルクスの思想を大きく歪め、スターリン主義という怪物を生み出し、人類をここまで酷い環境危機に直面させることになった原因といっても過言ではない。今こそ、この誤解を解かなければならないのだ。この誤解とはなにか。端的にいえば、「資本主義がもたらす近代

化が、最終的には人類の解放をもたらす」とマルクスが楽観的に考えていた、というものである。それは先に見た『共産党宣言』に典型的に見られるような思想である。(p152)

……マルクスの「進歩史観」には、ふたつの特徴がある。それが「生産力至上主義」と「ヨーロッパ中心主義」である。「生産力至上主義」とは、資本主義のもとで生産力をどんどん高めていくことで、貧困問題も環境問題も解決でき、最終的には、人類の解放がもたらされるという近代化賛美の考え方である。ここにあるのは、単線的な歴史観である。「生産力の高い西欧が、歴史のより高い段階にいる。それゆえ、ほかのあらゆる地域も西欧と同じように資本主義のもとで近代化を進めなくてはならない」というわけだ。これが、「ヨーロッパ中心主義」である。このような単線的「進歩史観」においては、「生産力至上主義」と「ヨーロッパ中心主義」が、密接に結びついているのだ。(p153)

**・マルクス主義に対する歪曲と矮小化である**

『経済学批判』序言を引用する。唯物史観の定式化と言われている。

人間は、その生活の社会的生産において、一定の、必然的な、かれらの意志から独立した諸関係を、つまりかれらの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係を、とりむすぶ。この生産諸関係の総体は社会の経済的機構を形づくっており、これが現実の土台となって、そのうえに、法律的、政治的上部構造がそびえたち、また、一定の社会的意識諸形態は、この現実の土台に対応している。……社会の物質的生産諸力は、その発展がある段階にたっすると、いままでそれがそのなかで動いてきた既存の生産諸関係、あるいはその法的表現にすぎない所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏へと一変する。このとき社会革命の時期がはじまるのである。経済的基礎の変化につれて、巨大な上部構造全体が、徐々にせよ急激にせよ、くつがえる。(岩波文庫)

生産力と生産関係の矛盾、経済的土台と上部構造の矛盾、その発展で上部構造と生産関係に対する政治革命と社会革命、これがマルクス主義である。

この矛盾論が筆者にはない。生産力の発展と生産関係に対する矛盾、それを生産力の発展に切り縮めている。「脱成長」を言うためだろう。

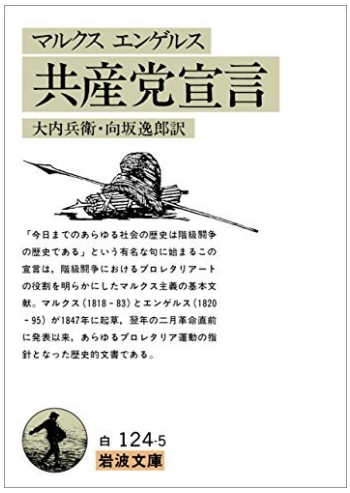
**・ソ連や中国は国有化・集団化の後に変質・転化**

「誤解」で、かってのソ連や現在の中国に官僚制国家資本主義、それがスターリン主義であるが、それが出現したのではない。マルクス主義を指導理論とした何万何億もの人民の実践と革命、その総括が重要である。なぜ出現したのか？　その総括が筆者にはない。

ロシアも中国も、いくら何でも、「資本主義のもとで生産力をどんどん高めていく」ではない。国有化と集団化で、生産関係の革命が達成され社会主義が実現された、と考えた。その上での生産力主義、言わば「社会主義の下で生産力をどんどん高めていく」であった。しかし、官僚制国家資本主義へ変質し転化した。なぜそうなったのか？

官僚主義、官僚が生産を管理、これは資本主義の生産関係であった。これが残存しこれで変質・転化した。生産を労働者階級が自主的大衆的に管理する。これが実現できなかった。なぜか、どう実現するか、歪曲と矮小化はこういう総括を閉ざす。

**②「ヨーロッパ中心主義」という批判**




近代化を推し進めることで、わざわざロシアに残っている共同体を破壊してしまう必要はない。むしろ、ロシアにおいては、これらの共同体が、拡張を続けて世界中を呑み込もうとする資本主義に対する抵抗の重要な拠点になる。共同体を「その現在の基礎のうえで」、西欧の資本主義がもたらした肯定的な成果を吸収しながら発展させていくことが、コミュニズムを実現するためのチャンスになるとマルクスは書いている(※) 。ここで重要なのは、資本主義という段階を経ることなしに……、ロシアはコミュニズムに移行できる可能性があると、マルクスがはっきりと認めている事実である。最晩年のマルクスが、単線的な歴史観とヨーロッパ中心主義から決別していたことは、明らかだ。(p174・175) ※1881 年に書いたロシアの革命家ヴェラ・ザスーリッチ宛の手紙

「もし、ロシア革命が西欧のプロレタリア革命に対する合図となって、両者がたがいに補いあうならば、現在のロシアにおける土地の共同所有はコミュニズム的発展の出発点となることができる。」(『共産党宣言』ロシア帆語版第２版への序文)

……この「序文」では、ロシアの共同体が、資本主義的発展を経由しなくて良いどころか、コミュニズム的発展を西欧よりも先にーその後、西欧の革命によって補完される必要があるとしてもー開始することができると、はっきり述べられている。……この議論をロシアだけに限定する必要はどこにもない。アジアやラテン・アメリカの共同体にも、拡大して良いはずである。というのも、マルクス自身、ミールだけでなく、アジアの「村落共同体」も、資本主義による暴力的な破壊を逃れて、現代まで残存することのできた原古的共同体の一種とみなしていたからだ。つまり、世界中に存在するそのような共同体は、ロシアの農耕共同体と同じ力を有している。そのようにマルクスは評価しているのだ。(p176)

社会主義へ至る経路は、もはや、西欧の発展モデルに限定されない。むしろ、非西欧社会においては、それぞれの制度や歴史がもつ複雑性や差異を考慮しながら、コミュニズムへの移行方法が検討されなくてはならないとマルクスは考えたのだ。ヨーロッパ中心主義の進歩歴史観は、むしろ、非西欧を中心とした共同体の積極的評価へと転換している。(p177)

想定は、ロシアはヨーロッパの社会主義革命の支援で、資本主義を経ることなしに、農村共同体から社会主義へ移行する、とした。眼目は3点。実際はどうか。

**・前提的な確認**

マルクス・レーニン主義が成立した革命は、資本主義が発達した国における革命ではなかった。資本主義が未発達な国における革命であった。『共産党宣言』の基礎となった 1848 年のドイツ革命、それにロシア革命も、中国革命も、ベトナム革命も。

そこでは、プロレタリア階級は、封建制(植民地的従属)に対するブルジョア革命(民族解放)直面した。ブルジョア革命を徹底して社会主義革命へ前進する。こういう歴史的に特殊性な実践と理論であった。弁証法的唯物論の主観的能動性に基づく社会主義革命の追求。資本主義と生産力の発展を期待する、そういう受動的な唯物論や革命論ではない。

・想定は歴史的事実に反する　ロシア革命と中国革命の実際は違う

第１点。想定は、外国=先進国の社会主義革命による支援を条件としていた。しかし、実際はそうではなかった。他力ではなく自力。条件は、自国のプロレタリア階級=共産党のヘゲモニー=指導性であった。中国革命もベトナム革命も、民主主義革命において、農民を組織し労農同盟を基礎に、人民民主主義独裁を樹立した。これこそが、社会主義革命とプロレタリア階級独裁へ前進するための主体的な条件であった。

ロシア革命では、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁であった。これがNEPの実際であった。都市で社会主義革命のプロレタリア階級独裁を樹立したが、全国的には広大な農村に対応して戦略的に退却し、ブルジョア革命=土地革命から再出発した。しかし、ボルシェヴィキは農民の組織化が弱かった。農民をエスエルに奪われていた。

第２点。想定は、農村共同体から社会主義へ移行する、とした。しかし、実際はそうではなく、集団化による移行であった。農民は、封建的搾取からの解放と土地革命と自営を希求した。これには逆らえない。資本主義によって、小商品生産は没落し、自営農民は階級分化する。その経験と基礎の上での集団化であった。

第３点。想定は、資本主義を経ることなしに社会主義へ移行する、とした　しかし、実際はそうではなかった。国家資本主義を経た移行であった。プロレタリア階級が国家を通じて資本主義を統制する、それが国家資本主義だが、それを経て社会主義へ移行する。

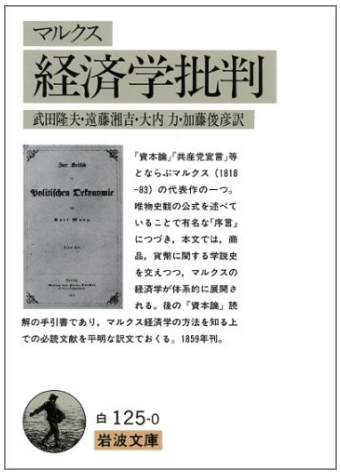
しかし、ロシアも中国もベトナムも、社会主義は実現できなかった。ブルジョア革命に終わり、官僚制国家資本主義化した。主観的能動性が、資本主義化の唯物論的必然性に包摂された。社会主義へは、現在の資本主義から移行するしかない。そういう現実がある。

・眼前の現実に反する

同じ現実が世界中にある。20 世紀は、社会主義革命の時代と言われたが、実際はブルジョア革命と資本主義化に終わった。グローバリズム、世界の資本主義化 or 資本主義の世界化、これが眼前の現実である。社会主義へは資本主義から移行することになる。

想定は、「資本主義という段階を経ることなしに」、原始共産制や前資本主義的共同体から、社会主義･共産主義へ移行する、としている。しかし、その展望が立つ国はない。

・原始共産制→奴隷制→封建制→資本主義→共産主義




これは人間社会の普遍的な発展法則である。世界的に資本主義が共通、資本主義→社会主義も世界的に共通、ここから、法則性と普遍性をますます確信でき断言できる。

大ざっぱにいって経済的社会構成が進歩してゆく段階として、アジア的、古代的、封建的、および近代ブルジョア的生活様式をあげることができる。(『経済学批判』序言)

特殊性はある。「アジア的生産様式」はその最たるものである(「総体的奴隷制」)。ヨーロッパもアジアも特殊であって、普遍ではない。普遍性は特殊性の中に存在する。

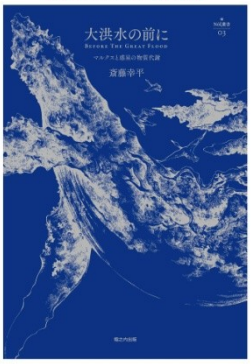
封建制はアジアが先進国であった。資本主義はヨーロッパが先進国であった。しかし、資本主義の現在の中心はアジアである。韓国･

台湾とASEAN、中国とベトナム。共通に国家権力をテコとする開発独裁と官僚制国家資本主義、これが、20 世紀に後発国で資本主義が成長し発展した、その2つの典型である。いずれアフリカがそうなる。資本主義→社会主義は、ヨーロッパ中心史観ではない。世界的な現実である。

筆者は、周辺部の新興資本主義化を見ていないか、外国資本の移植といった程度にしか見ていないのではないか。外因は内因を通じて作用、内因が主で外因は副。現在はアジア、いずれはアフリカ、そこにおける資本主義の発展は内在的発展である。

社会主義･共産主義へ移行する原動力は、資本主義の中にある。内在的矛盾、生産力と生産関係の矛盾が発展して社会革命が起きる。この内在的矛盾を筆者は見ていない。

**③資本主義が人間と自然の両面で生産力を破壊**




……持続可能性なき生産性の増大は、「略奪」なのである。……「生産力」の概念には持続可能性という観点が含まれなくてはならない。

（『大洪水の前に−マルクスと惑星の物質代謝』2019 年堀之内出版 p192）

マルクスにとって、人間と自然の物質代謝を持続可能な形で維持する可能性を掘り崩すような生産力の増大は「発展」ではなく、「略奪」にほかならない。生産力至上主義としてマルクスはしばしば批判されてきたが、「生産力」概念は、人間と自然の物質代謝の意識的な管理を実現するための主体的能力も含むものとして理解されなければならないのである。（『大洪水』p281）

**・持続可能性　生産力概念の発展**

生産力は、人間が労働して自然に主体的に働きかける持続可能な物質代謝である。マルクスは、持続可能性を含めることで、生産力の概念を発展させた。地球の自然環境の破壊は、生産力の発展ではない。破壊である。

このマルクス晩年の理論的営為を、筆者は前著･『大洪水』では見ていた。しかし、本書･『人新世』では論理の発展がない。見失っている。

**・生産力と生産関係の矛盾　その拡大と深化**

自然の搾取を追求する資本主義の生産関係が自然を破壊し、生産力を破壊する。持続可能性を含めて生産力の概念を発展させた上で、資本主義批判を人間と自然の関係まで、自然環境破壊の批判まで進めると、論理を発展させると、こうなる。

もうひとつの生産力破壊。資本主義は、人間の搾取を追求し、格差を拡大し貧困を蓄積している。労働力の再生産が不可能、労働者が結婚して家族を作ることができない程に達している。人間の破壊である。それに、自然の破壊が加重されている。

生産力は、労働という人間の主体的能力を含む。人間と自然が二大要素である。その生産力に対して、その持続可能性に対して、資本主義の生産関係が、桎梏に転化し、人間と自然の両面から破壊している。これは生産力と生産関係の矛盾、その拡大と深化である。それが発展して社会革命が起きる。人間主体であるプロレタリア階級が生産力を代表し、その階級闘争が革命の原動力になる。

生産力と生産関係の矛盾論、これをますます確信でき断言できる。筆者は、この資本主義の内在的矛盾とその発展を把握していない。資本主義の外に、原始共産制を含む前資本主義的共同体に原動力を求めてしまっている。

## (５)資本主義批判と社会主義･共産主義論　生産関係の根幹は所有制

### 第５章　加速主義という現実逃避

資本主義の技術革新の先にあるコミュニズムにおいては　完全に持続可能な経済成長が可能になると主張するのだ。(p207)

……地球からの掠奪を強化し、より深刻な生態学的帝国主義を招くことになってしまうのだ。(p211)

「左派加速主義」を批判している。欧米で支持を集めているらしい。地球と自然は有限だから、生産と物質代謝も有限、それを増大させる成長の持続はありえない。

それはいい。問題は、資本主義そのものに対する批判と、そこから導き出される社会主義･共産主義論である。それを、筆者は「脱成長コミュニズム」の立場で展開していく。

**①資本が労働を包摂し専制的に支配する　賃金奴隷制**

いまや労働者たちは資本のもとで働くことでしか、自らの労働を実現できない。こうして自律性を奪われた労働者は機械の「付属品」になっていく。「構想」という主体的能力を失うのだ。かたや資本の支配力はその分だけ増大する。包摂を通じた、労働過程の再編成を通じて「資本の専制」が完成する。(p223)

労働者階級は、生きていくためには、資本に雇用され、資本の指揮の下で労働せざるをえない。剰余価値を生産し搾取されざるをえない。資本が剰余価値を生産し搾取できる、その限りで、労働者階級は雇用され労働でき、生きていける。生殺与奪の全権は資本にある。社会の生産は全て資本が管理し、労働者階級はその管理から完全に排除されている。資本が労働を包摂し、専制的に支配する。

形式は労働力商品の平等な売買関係=賃金制度だが、実質は奴隷制、それが賃金奴隷制である。こういう生産関係の根幹には、生産手段の所有制がある。

**②資本主義は「労働と所有の分離」**

### 第６章　欠乏の資本主義　潤沢なコミュニズム

……こう問わないといけない。99%の私たちにとって、欠乏をもたらしているのは、資本主義なのではないか、と。資本主義が発展すればするほど、私たちは貧しくなるのではないか、と。(p234)

……この囲い込みの過程を「潤沢さ」と「希少性」という視点からとらえ返したのが、マルクスの「本源的蓄積」論なのである。マルクスによれば、「本源的蓄積」とは、資本が<コモン>の潤沢さを解体し、人工的希少性を増大させていく過程のことを指す。(p237)

土地でも水でも、本源的蓄積の前と後を比べてみればわかるように、「使用価値」(有用性)は変わらない。コモンズから私的所有になって変わるのは、希少性なのだ。希少性の増大が、商品としての「価値」を増やすのである。(p251)

「使用価値」を犠牲にした希少性の増大が私富を増やす。これが、資本主義の不合理さを示す「価値と使用価値の対立」なのである。(p252)

資本がその支配を完成させる、もうひとつの人工的希少性がある。それが「負債」によって引き起こされる貨幣の希少性の増大である。(p254)

……資本主義の人工的希少性に対抗する、潤沢な社会を創造する必要がある。それがマルクスの脱成長コミュニズムなのだ。(p257)

……<コモン>のポイントは、人々が生産手段を自律的･水平的に共同管理するという点である。(p258)

希少性や欠乏と潤沢、価値と使用価値の対立、これらは結果であって、根源ではない。資本主義批判、および本源的蓄積と資本蓄積の把握が、根幹を外している。

**・生産手段を資本が独占**

資本主義は労働と所有の分離である。労働者階級が生産手段から切り離され、生産手段を資本が独占している。この所有制、これが基礎にある。その上に、生産関係全体が成立している。それは階級関係でもある。労働者階級が資本へ奴隷的に従属している。

こういう所有制と生産関係からして、資本は、搾取と価値増殖と資本蓄積を生産の目的とする。その結果、経済成長が追求され、人間と自然が搾取され破壊される。

**・本源的蓄積と資本蓄積**

この資本主義の生産関係を創出したのが、本源的蓄積である。農民を土地から切り離し、生産手段を所有しない労働者階級に転化させる。外国貿易で貨幣を蓄積し、生産手段と資本に転化する。この過程は、経済外的強制、国家的暴力で遂行された収奪である。絶対主義や重商主義など。

そして、資本主義は、商品の生産であり、剰余価値の生産であるが、それだけでなく、資本主義そのものの生産である。生産手段の独占と無産の労働者階級という関係が、再生産され拡大再生産される。これが、本源的蓄積とは区別される、経済的自律的に実現される資本蓄積である。実際は政治的国家的に促進される。植民地主義、中心部と周辺部の支配と従属の関係、中心部における差別主義による労働者階級分断など。

**③社会主義・共産主義は「労働と所有の再結合」**

## 第７章　脱成長コミュニズムが世界を救う

……脱成長コミュニズムをどう実現させるか、脱成長コミュニズムがどのように気候危機を解決するかを説明していきたい。(p278)

マルクスによれば、この亀裂を修復する唯一の方法は、自然の環境に合わせた生産が可能になるように、労働の領域を抜本的に変革していくことである。……『資本論』で展開された物質代謝論によれば、人間と自然は労働でつながっているのだ。だからこそ、労働のあり方を変えることが、自然環境を救うために、決定的に重要なのである。……肝腎なのは、労働と生産の変革なのだ。(p291)

……所有や再分配、価値観の変化だけに注目し、労働のあり方を抜本的に変えようとしないなら、資本主義に立ち向かえない。(p292)

……問題にするのは、ライフスタイルの次元での「帝国的生活様式」ではなく、そのような消費を可能にしている生産の方だ。つまり、重要なのは「帝国的生産様式」の超克である。前者を是正するためには、後者こそ克服しなくてはならない。(p296)

「脱成長」の一語で集約するのは無理がある。強いて言えば「反搾取」だろう。

**・根幹を外している　所有制の革命と政治革命があいまい**

「労働と生産の変革」が「肝腎」と、筆者は強調する。生産の目的の変革だろうか、生産関係の革命だろうか。いずれにせよ、所有制の革命がないと、それはない。

社会主義・共産主義は、資本主義とは反対に、労働と所有の再結合である。生産手段を、労働者階級が共同所有する。社会が共同所有し共同財産とする。この所有制の革命を基礎に、生産関係全体が、そして生産の目的が革命され変革される。それが社会革命。

労働者階級が生産手段を共同所有する。そのことで、社会的関係でも自然的関係でも、生産を主体的に管理できる。人間が自然の限界の枠内で、自然と持続可能に循環型に共生する。そこへと、搾取と価値増殖と資本蓄積から、生産の目的を変革できる。

所有制の革命は、生産手段を独占する資本の収奪であり、そのためには政治革命が必要である。所有制の革命があいまいということは政治革命があいまいということである。

## （６）環境問題と国際主義

### 第８章　気候正義という「梃子」

……ロシアの農耕共同体やインドの反植民地主義運動のなかから、晩年のマルクスは反資本主義運動の可能性を積極的に摂取しようとしていた。……同じように、今日の持続可能で公正な社会を目指すミュニシパリズムの自治体も、……グローバル・サウスにおける抵抗運動から、積極的に学ぼうとしている。(p341)

晩年のマルクスは、イングランドによるアイルランドの植民地支配を批判しながら、……後者(※アイルランドの抑圧された人々)が解放されなければ、前者(※イングランドの労働者たち)もけっして解放されないという意味で、革命の「梃子」はアイルランドにあると言い切ったのだ。まったく同じように、現代においては、グローバル・サウスにこそ、革命の「梃子」がある。(p347・348)

本書は、グローバリズムと環境問題で始まり、環境問題と国際主義で終わっている。資本主義が自然と環境の破壊を外部化し転嫁している。中心部のプロレタリア階級は、これに反対して闘争し、それによって周辺部の人民に連帯しなくてはならない。この国際連帯では温暖化と気候変動の問題が重要である。それは納得できるが、他にもある。

アメリカと中国、帝国主義の両陣営間の覇権闘争と帝国主義戦争の危機、それに反対する闘争も、国際連帯で重要である。帝国主義国のプロレタリア階級は、環境問題であろうが、覇権と戦争の問題であろうが、第一義的に自国の帝国主義に反対して闘争する。これも国際主義であり、社会主義革命の「梃子」であろう。

中国は「周辺部の中心化」だが、アメリカ・西ヨーロッパ・日本には「中心部の周辺化」がある。格差・貧困問題。性差別、民族・人種差別、雇用差別などで、大きな下層が形成され、労働者階級が大分裂している。ここでも下層に依拠する。それによってプロレタリア階級を統一する。これも社会主義革命の「梃子」であろう。

## おわりに

おわりに　歴史を終わらせないために

最後に、筆者のマルクス主義批判にコメントしたい。そこで、「第８章」から引用する。

結局、従来のマルクス主義が成長の論理にとらわれ続けてきたことがよくわかる。社会主義は、搾取をなくそうとした。だが、資本主義で実現された物質的な潤沢さを自国の労働者階級のために使うような社会を志してきたのだ。そうやって実現される将来社会というのは、資本家がいないというだけで、あとはそれほど今の社会と変わらない。実際、ソ連の場合は、官僚が国営企業を管理しようとして、結果的には「国家資本主義」と呼ぶべき代物になってしまった。(p351・352)

マルクス・レーニン主義を指導理論とし、何万何億もの人民が、革命を実践した。ロシア革命と中国革命だけでなく、ヨーロッパでも日本でも世界中で。結果は、ソ連も中国も官僚制国家資本主義。これは大きかった。なぜブルジョア革命と資本主義化に終わったのか、どうしたら社会主義革命を達成できるか。総括は現在も続いている。

生産関係は3つの側面で構成される。1.所有制、2.直接的な生産における労働指揮、3.分配制。3.は消費手段だけでなく、生産手段も含み、蓄積と拡大再生産の管理である。ソ連と中国では、2.と 3.の官僚主義が、1.の国家所有を官僚制国家資本主義化した。

筆者は、マルクス晩年の理論的営為を解明した。経済学だけでなく、政治理論にも哲学にも大

きな意義がある。しかし、ロシア革命と中国革命の実際を総括した上でマルクス主義を批判している、とは思えない。総括してからにしてほしい。　　（おわり）